

## 『神林の行方』

### ○ 海辺の道（夕）

無島と陽都が海沿いを歩いている。

数人の散歩者。

風が吹き、船が揺れている。

陽都「そんな事だからお前も気をつけろよ」

無島「気をつけるもなにも。俺、今東京に住んでるんだぞ」

陽都「見たんだよ」

無島「え」

陽都「神林の家に皆で行ってから、うちの店も普段通りに戻って、それから暫くして、今と同じようにこの道を子供と一緒に歩いてた。そしたらそこに、神林がいた」

無島「ここって…話しかけたのか」

陽都「いや、最初は驚いてなんて声をかけていいか分からなかった。だから、暫く近くで様子を伺った」

無島「なにしてたんだ」

陽都「ビラ巻いてた」

無島「なんの」

陽都「暫くしてビラを配り終わると大きいカバンを持ってその場を去っていった」

無島「話しかけなかったのか？」

陽都「なんだかね」

無島「それになんて書いてあったんだ」

陽都「気になって、ビラを探した。そして見つけた。なんて書いてあったと思う。行方不明者、情報求む。写真はお前だ」

無島「え、なんで俺」

陽都「それは分からない。それで、お前なにか身の回りで変わった事は無かったのか」

無島「なんにもないよ」

陽都「そっか」

無島

陽都「で、続きが会って、川中いるだろ」

無島「ああ、」

陽都「川中が出張で東京に行った時、見たんだって」

無島「神林」

陽都「ああ。またピラ巻いてたんだって。しかも、今度は何人もいたらしい」

無島「何人かが俺を捜している」

陽都「神林、どうやら奴等は組織化している」

無島「そんな事」

陽島「まあなにも無いならいいか」

無島「いいわけ無いだろ。なんなんだ」

陽都「二年も前の話。それから神林の話は聞かない」

無島

大麻を吸引する仕草

陽都「お前まだやってんのか」

無島「たまに。薦められたら。お前は」

陽都「辞めた」

無島「そっか」

路面電車がやってくるの見える

無島「悪い。あれ乗るわ」

陽都「おお。わかった。じゃあ」

無島「また連絡する」

その場、足早に去る無島。

○ 丘までの道（朝）

夜明け前。

無島と陽都と神林が斜面を歩いている。

無島「見えたか」

陽都「ああ。見えた」

少し遅れて神林、今にもその場に倒れそう。

無島「大丈夫」

神林「大丈夫っす」

無島「顔色悪いぞ」

神林「あとちょっとなら大丈夫っす」

無島「ならいいんだけど」

神林「さーせん」

陽都「夜明けだからな。顔色が悪く見えるんだよ」

神林「うっす」

無島「もうすっかり明るい」

陽都「夏至だからな。しかし今日は雲が多い。まだ大丈夫だ。急ごう」

その場に倒れ込む神林。

無島「大丈夫か」

神林「さーせん。自分これ以上無理っす」

倒れている神林に近づく無島。

神林「自分、置いてって下さい」

無島「そういうわけにもいかない」

神林「自分、足手まといっす。これ以上、二人に迷惑かけれないっす」

無島「少し休憩しよう」

陽都「行くぞ」

無島「おい、どうすんだよ」

陽都「ほっとくぞ」

無島「ようやくここまで来たんだ。少し休憩しよう」

陽都「日の出に間にあわなければ意味がない」

無島「だけどコイツをここに置いてはいけない」

陽都「勝手にしろ。俺は行くぞ」

突然、陽都の足に飛びつく神林

陽都「なにすんだ」

陽都の足にしがみつくと神林

陽都「離せ、離せよ」

無島「お前、どうしたんだよ」

無島も仲裁に入るが一向に手を離さない。

と、丘の方角の分厚い雲の隙間から、三人を太陽の光が三人を照射する。

暫く、それを眺める一同。

神林の手を振り払う陽都。

陽都「帰るぞ」

その場を去る神林。

無島、それに続く。

無島「お前のせいだから」

取り残される神林

○飛行機

○喫茶店

神林の集団に属している女性、川崎真実（30）

テーブルを挟んで無島、そしてその隣には陽都が座っている。

無島「だから、何故逃げたんですか」

真実「なんでって、あなた達が追いかけてきたから」

無島「僕たちはあなたに聞きたい事があった。だけどあなたは僕たちを見るなり、走り出した」

真実「それは違う。私に言わせれば、あなた達が追いかけてきた。だから逃げた、よ」

無島「川崎さんは僕たちが神林の事を調べている事に気付いていた。なので僕達が声をかけてきたから逃げたんです」

真実「そんな人は知らない。いえ、仮に知っていたとしても、それはあなた達の勝手。私がとりあう道理が無い。今すぐお引き取り願います。私、知ってるんですよ。あなた達が私の事、こそこそ調べてるの。迷惑です。これ以上近づくのならば、私、警察にいきます」

無島「分かりました。それでは追いかけた事は認めます。謝ります。なので、神林の事を教えて頂けないでしょうか。僕たちはずっとアイツを探しているんです」

真実「だから知らないっていつてるでしょ。第一、あなた達はその神林って人のなんなんですか」

陽都「長崎の友人です」

真実「それだけですか」

陽都「そうです」

真実「私、どうやら馬鹿馬鹿しい事に巻き込まれたようね」

陽都「僕もそう思っています。これをお渡ししておきます。気が向いたら、連絡下さい」

カバンから取り出した紙を真実に渡す。

紙には連絡先が書いてある。

真実「頂いておきますが、だけど、私、なにもありませんから」

無島「わかってます」

真実「それでは、失礼します」

その場を去る真実

無島「帰していいのか」

陽都「追いかけたら逆効果だ」

無島「連絡、あるかな」

陽都「してくるさ。きっと」

無島「そんなもんかな」

陽都「そういうもんだ」